

崑玉撮要集平假名附卷之下目錄

四十七

娑婆即寂光事

四十八

本師を捨捨づかざる事

四十九

一歩も行どて靈山に詣る事

五十

皆成佛道の事

五十一

提婆之事

五十二

煩惱即菩提の事

五十三

一切菩薩此經にて成佛の事



五十四 末法まっぽう無戒むけいの僧そうを供養くうやうとぶとぶ事

五十五 持經ぢきやう即すなはち供養くうやう

五十六 食まゆに多種たぐひ有あ事

五十七 自みづかを疑うたがひ師しを疑うたがひ法ほふを疑うたがふ事

五十八 約束やくそく之事

五十九 昨日きのう八人はつにんの上うへ今日けふ只ただ我身わがみの上うへ如說によつて修行しゆぎやう之事

六十 時刻ときくわく相應おこ之事

六十一 釈迦しやくか像ざう建立たうじやう事

六十二 木畫もくが二像にざう開眼かいげん

六十三 生身しやうしん佛ぶつ之事

六十四 親おやの命いのちお背そむと法華經ほふけきやうを持たも孝行かうぎやう之事

六十五 法華ほふけ退轉たいてん之事

六十六 一字いちじ一點いちてんも捨すつる人ひと外ほかの事

六十七 轉重てんじゆう輕受けいじゆう之事

六十八 其人そのひと命終いのちのしゆう之事

六十九 如我によが等とう無異むい之事



七十 我即歡喜の事

七十一 一字小余字を収る事

七十二 羅什略を好む事

七十三 智と愚と題目を唱るに同る事

七十四 持經者の宿善

七十五 首題即衆生佛性と云事

七十六 名體相順之事

七十七 裸の如き者ハ衣を得る事

七十八 無常之事

七十九 名號より法號勝る事

八十 世間眼之事

八十一 今經説劣機成佛

八十二 外道神變現むる事

八十三 入涅槃之事

八十四 偏頗無題目を唱る事  
附生死一大事血脉事

八十五 三根一生成佛の事



八十六

法華題目名聞難事

八十七

題目澄文を唱る事 附宗旨建立の事

八十九

信力小依り成佛と云ふ事

九十

今此三界下

九十二

人法よ勝る事

九十二

凡聖佛性同やく妙法と呼願る事

九十三

雨之祈事

九十四

三皈を唱より題目を持ぐ勝事

九十五

己心の佛性迷悟小依事

九十六

此經難持下 附此即題目事 附真佛子事

九十七

臨終小題目を唱る事

九十八

信者本尊行儀所作事

九十九

題目計唱る功德之事

百

逆縁功德の事

百

本迹の二門妙法二字小収る事

并諸佛菩薩草木瓦砾等妙法の二字小収る事  
并諸佛菩薩草木瓦砾等妙法の二字小収る事  
并諸佛菩薩草木瓦砾等妙法の二字小収る事  
并諸佛菩薩草木瓦砾等妙法の二字小収る事



百二 善無畏破地獄之事

百三 今此三界之事

百四 病即消滅之事

百五 釈迦日蓮一人苦之事

下之卷目錄終

崑玉撮要集平假名附卷之下

四十七 娑婆即寂光事

四條金吾殿御書外二云云。今度法華經の行者として流罪死罪及び流罪の伊東死罪の龍の口あり。相州龍の口を日蓮が命を捨たる處

かま。佛土おぼ劣おとと耶や日蓮にっが難あ値おふ處ところ毎つひ佛土ぶつどなるべし。娑婆しあ世界せかいの中うちの日本にっぽん國くにの中うちの相模國さま相模國さまの中うちの片瀬かたせ片瀬かたせの



中ふハ龍の口ハ日蓮が命を留め置更ハ法華  
經の御故ふ生バ寂光土と云々一神力品云  
若於林中。涅槃云々

文永八年九月廿一日

日蓮在御判

放光授職灌頂下云云。神力品云云。若經卷  
所住之處。而涅槃云々園林樹下僧坊若白衣舍  
殿堂山谷曠野等を舉畢て當知是處即是道  
場と結一玉へり。仍て處をバ斥ふべからず。法華經

の御座ハ即是道場あり。文ハ道場との寂光土也  
但一山谷曠野等を見たまふ。同居の穢土とおぼ  
しけまごも。本有の寂光ハ三土の色質。漸減すべ  
からず。故ハ釈ハ。豈離伽耶別求常寂光非寂光  
外別有娑婆と云へり。輔正記云云。此經ハ即穢  
而淨同居即寂光あり云々。妙樂ハ今日以前從寂  
光本垂三土迹至法華會攝三土迹飯寂光本云々。  
此等の文理炳然也。何まの處ハてあれ。妙法の



五字を尊む道場不詣の常寂光土と思ふなり  
なり敢て疑ふことなから

四十八 本師を捨捨可からざる事

成佛用心抄外五十七云く大通佛の第十六の釈迦如来  
来下種せし今日の聲聞全く弥陀薬師に遇  
て成佛せざることを譬は大海の水を家内より汲来  
らんよ。家内の者の縁をふるふ事あり。然まども  
汲来る處の大海の一滴を置いて他方へ大海の水と

求ん夏大ある僻案也。大愚痴あり。法華經の大  
海の智恵の水を受たる。根源の師を忘て。餘へ  
心に移さば必し輪廻生死の禍ひ成るべし。但し

師ありとも誤り有者まへ又捨つる義も有る。  
世間佛法の道理不依へまあり。末世僧等へ佛法  
の道理まへ知らば我慢小著して師をいやしみ。  
檀那をへつらうあり。但し正直あして小欲知足  
たらん僧こそ。眞實成るべし也。



四十九 一步も行ばどく靈山に詣る事

最蓮坊御書外三云く。去まば我等が居住して。一乘を修行する処ハ何処あるもひく常寂光の都たるべし。我等が弟子檀那と成らん人ハ一步を行ばどく。天竺の靈山を見本有の寂光土へ昼夜に往覆しむる事。ねども計りありしに。

五十 皆成佛道の事

聖愚問答抄外一云く。抑も今の法華經を説く

時益を得し輩。迹門界如三千の時ハ敗種の二乗佛種を萌と。四十二年の間ハ永不成佛と簡られ。

在る處々の集會より罵詈譏謗の音をのこ聞人天大會不思ひうとまされて。飢死をべかりし人も。

今の經小来て。舍利弗ハ華光如来。目連ハ多摩羅跋旃檀香如来。阿難ハ山海惠自在通王如来。羅候羅ハ踏七寶華如来。五百羅漢。普明如来。二十人の

寶相如来と記前より預る。頭本遠壽の日ハ。微塵菩薩



薩增道損生一。位大覺隣なる去ねの天台大師の釈を披見し、これ他經の菩薩の佛も成と云て二乗の得道の永く無し善人佛も成と云て悪人の成佛を明さば男子の佛も成と説て女人の地獄の使と定む人天の佛も成と云て畜生佛も成と云らば然るを今の經の是等が皆佛も成と説憑哉末世悪世の生を受たりと云へども提婆が如き五逆をもつたらば三逆をも犯さず而るも提

婆猶天王如来と記勃を得況や犯さる我等も身をや。八歳の龍女既し蛇身を改めどく南方の妙果を證し況や人界の生を受たる女人をや。受難をの人身値難正法あり汝邪を翻して正し付凡を轉じて聖を證と欲は念佛真言禪律等を捨て此一乘妙典を受持しべし。若尔らの妄染の塵を拂

て。清淨の覺體を證ん。夏疑無る可き也。

御書外上云く善悪不二の南無妙法蓮華經を



を悪人も必ず成佛より邪正一如の南無妙法蓮華  
經かまほ邪見弥よたのこ有り皆成佛道の南無  
妙法蓮華經あまほ十界平等利益より速疾頓成の  
南無妙法蓮華經なれば二生三生をも期すべし  
只是入妙覺の大法あり仰で信受すべし此度  
幸ひ此妙典は值奉り無窮の生死をへ刹那より  
無量の行願をへ一念の間よこそく妄想の夢  
即座より覺畢ぬ

五十一 提婆之事

祈禱抄内十六云く提婆達多は又師子頰王の孫  
淨飯王の弟釈迦如来の伯父たり斛飯王の  
御子阿難尊者の舎兄也轉輪聖王の御一門南  
閻浮提より賤かざる人也。我身は五法を行

て佛より尊げよ成鐵をのべて千輻輪行螢火を  
集めて白毫と成六萬歳を胸に浮べ象頭山よ  
戒壇を立多く佛弟子を奪ひ取て瓜小毒をぬり。



佛の御足よゆらんと企て蓮華比丘尼を打殺し。大  
 石を放ち佛の御指をあらやまら具さふ三逆を犯  
 し。結句ハ五天竺の悪人を集め佛並に御弟子檀那  
 不怨を成ら頻婆娑羅王ハ佛の第一の御檀那あり。  
 一日ハ五百兩の車を送り日々に佛並に御弟子を  
 供養しなむらも提婆嫉妬深くと阿闍世太子と語  
 らひて終一尺の釘を七つうちとつけよ成しなる。  
 終に王舍城の北門の大地破きて阿鼻大城に墮し

三千大千世界の一人も是を見ざる夏ハ無り  
 去まば大地微塵劫ハ過ぐとも阿鼻大城をバ  
 出べかばとこそ思ひに法華經あり天王如  
 来と成らせむひけるこそ不思議は尊けし  
 法華題目抄内十二云提婆が三逆ハ具不犯。其外  
 無量重罪を作りも天王如来と成る況や二逆  
 一逆等の諸の悪人の得道疑ハ無き夏たとへバ  
 大地を返すに草木等の返るが如し賢石を破る



者輒ある草を破るが如し。故に此經を妙と云あり

又云く。去まば大地微塵劫の過とも無間大城

をバ出可かず。劫石のひすらぐと云とも。阿鼻大

城の苦ハ。尽くところを思合ひたりし。法華經の

提婆品ありて。教主釈尊の昔師天王如来と記し

あふまこと不思議ハ。覺き。故に此經をバ妙といふ

五十三 煩惱即菩提事

頼基殿御返事 五十六云く。欲を離まばくと佛も成

ひひける道ハ。普賢經小法華經の肝心を説れて

ハ。不断煩惱不離五欲等云く。天台大師摩訶止觀

云く。煩惱即菩提生死即涅槃等云く。龍樹菩薩

の大論小法華經の一代小勝きて。いみじくも様と釈

し。いみてハ。譬ハ大薬師の能毒を薬にて薬と為

如く云く。小薬師ハ。薬を以て病を治す。大醫ハ。大

毒を以て大重病を治す等。

五十三 一切菩薩此經にて成佛の事



祈禱抄内十六云一切の菩薩へ又始め華嚴經より  
 四十餘年が間佛ふ成んと願ひかたも叶はして法  
 華經の方便品略開三頭一の時ふ求佛諸菩薩大  
 數有八萬又諸萬。欲聞具足道と願ひて。廣開三頭  
 一を聞て菩薩聞是法疑網皆已除と説さむひぬ。  
 其後自界他方の菩薩雲の如く集り星の如く列  
 りむひる。宝塔品の時八十方の諸佛各無量無邊の  
 菩薩を具足して集りむひる。文殊へ海より無量の

菩薩を具足して又八十萬億那由他諸菩薩又過八  
 恒沙の菩薩地涌千界の菩薩分別功德品の六  
 百八十萬億那由他恒沙の菩薩又千倍菩薩復  
 一世界の微塵數の菩薩復三千大千世界の微塵  
 數の菩薩又二千中國土微塵數の菩薩又小千國  
 土の微塵數の菩薩又四四天下の微塵數の菩薩  
 三四天下二四天下四天下の微塵數の菩薩復  
 八世界の微塵數の衆生藥王品の八萬四千の菩



薩妙音品の八萬四千の菩薩又四萬一千の天子。  
 普門品の八萬四千陀羅尼品の六萬八千人。妙莊  
 嚴王品の八萬四千人。勸護品の恒河沙等の菩薩。  
 此等の菩薩悉く數へば十方世界の微塵の如し。  
 十方世界の草木の如し。十方世界の星の如し。十  
 方世界の雨の如し。此等の皆法華經にして佛とを  
 らせたまへり。

五十四 末法無戒の僧供養すべき事

教機時國鈔内共三丁云く佛滅後の次の日より正法  
 一千年の。持戒者多し。正法一千年の次の日よりの像法  
 一千年の。持戒者多し。像法一千年の次の日よりの末法  
 一千年の。破戒の者多し。正法一千年の破戒無戒を捨持戒  
 者無戒の者多しを供養すべき。像法一千年の無戒を捨て破戒と供  
 養すべし。末法一千年の無戒の者を供養して佛の如  
 くすべき。

五十五 持短即供養







出ハ土を食ヒ人ノ皮肉骨髓等を食ヒ鬼神も有リ尿糞を食ヒ鬼神も有リ壽命を食ヒ鬼神も有リ石を食ヒ鬼神も有リ魚も有リ鐵を食ヒ鬼神も有リ鳥も有リ地神天神日月帝釈大梵王三乘菩薩佛ハ佛法を嘗テ食ヒ魂ヲ給フ例ハ乃往過去小輪陀王トリ天王御座ト一箇浮提の主アリ賢王也此王ハ何物トモ供御ト爲シ給フトヤセバ白馬の鳴色と聞食テ身も長生し心も

安穩ふして代を持ちぬ例ハ蝦蟇トリト出ラ母の鳴音を聞テ生長スル如シ秋の鹿の鳴に華さく如シ象牙草の雷の聲おもらみ柘榴の石ふあつて深るる如く去バ此王白馬を多く集テ飼セ給フ又此白馬の鳴く事ハ白馬を見て鳴馬あまバ多く白鳥を集ムル〇又宿業ハ依テ果報ハ尽けん千萬の白鳥一時ハ失セカバ又無量の白馬も鳴事止ぬ大王ハ白馬の聲を聞ざるガ故ハ花の



萎しな如ごとく月つきの蝕くさくはるる如ごとく御身おんみの色いろかりかよ  
く六根ろくこんもろくくせし。志こころほれはるる如ごとく御座おんざかハ  
后ごもろくくくならせむ。百官ひやくくわん萬乘ばんじやうも如何いかが  
せんまがと敷まがる。先まづ外道げだうの法あふ不仰おかせ付つけて数日すうじつ行ゆりせ  
けき共ども白鳥はくちう一いつも見みざれば白馬はくばも鳴なく事こと無なし。此この時とき  
外道げだうの祈いのりを留とどめて佛敎ぶつこうよ仰おかせ付つけられけり。其その時とき馬  
鳴菩薩まうぶつと申まをす。小僧こそう一人いちにん有あり。召出めいしゆされけき。此この僧そう  
の曰いひく國中こくちゆう外道げだうの邪法よこみちを留とどめて佛法ぶつぽうを弘通くわんつうし

玉たまふづくハ馬うまを鳴なせん事こと安やすしと云いふ。勅宣ちやくせんよ云いふ。  
仰おほの如ごとく成なるる。云いふ。尔その時とき馬うま鳴な菩薩ぼつさつ。三世さんぜ十方じふぱう  
の佛ぶつよ祈いのり清きよやせ。かハ忽たちまちよ白鳥はくちう出い来きせり。白馬はくばハ  
白鳥はくちうを見みて一音いつおん鳴なけり。大王だいおう馬うまの聲こゑを聞きて  
眼めを開ひらき玉たまふ白鳥はくちう二ふたツ乃すなはち百千ひやくせん出い来きし。けきハ  
百千ひやくせんの白馬はくば一いつ時ときよ喜よろこび鳴なけり。大王だいおうの御色おんいろふとる  
事こと日蝕にちよくの本もとよ覆かへる。如ごとく身みの力ちから心こゝろの計はかりと先せんく  
よ百千ひやくせん萬倍まんばい超こえたり。后ごも喜よろこび大臣だいじん公卿くけいもいさそ。



萬民も掌を合せ。他國も頭を傾けたりと見て。以て思へ。食せ。今の梵天帝釈日月四天天照太神八幡大菩薩日本國の三千一百三十二社の大小の神祇は彼過去の輪陀王の如し。白馬の日蓮なり。白鳥の我寺。一門あり。白馬の鳴。我寺が南無妙法蓮華經と唱る音也。此聲を聞せり。梵釈日月四天神等争り色を増し。目を開き。勢力を盛ん。成し給。つらつら。如何。我寺と守護し。むら

ざらぶ。と。つよくと。思食。と。あり

五十七 自と疑ひ師を疑ひ法を疑ふ事

持法華問答鈔内卷小云。譬へ高岸の下より人有り。登る事あり。さう。又人岸の上より人有り。繩を下し。此繩小取り付。我岸の上より引のかせんと云ん。引人の方を疑ひ。繩のよう。か。ん。事とあやぶみて。手をおさめて。是を取らざらんが如し。岸の上より登る事を得。若他の言は。隨ひ手と



延て是を取んよん登る事を得ず。唯我一人能  
為救護の佛の御力を疑ひ。以信得入の法華經の  
教への綱をわやぶみて。決定無有疑の妙法と唱つ  
奉らざらんハカ及む比菩提の岸よ登らん事  
難し。不信の者の墮在泥梨の根源あり。去れば經  
よん。生疑不信者則當墮惡道と流り

五十八 約束之事

祈禱抄四十八云く樊於期と云一者ハ荆軻ハ頭を

取らせ季札と云一者ハ徐君の塚よ劍を懸しむ。  
約束をたざぐ下ぐ為あり。此等の震且邊國の夷の  
如くならず者どもたも。友の約束ふ命を亡し。身ハ  
もかて思ふ。諸大菩薩ハ本より大悲代苦受苦  
の誓ひ深し。佛の御諫め無まごとも争う法華經  
の行者と捨玉ふべと云や

五十九 昨日ハ人の上今日ハ我身の上如説修行の事

如説修行抄三十六云く哀ある哉今日日本國の萬



八日蓮并に弟子檀那等が三類の族敵を責らま  
て大若小相ふを見て悦で笑ども昨日の人の上今日  
の我身の上あまは日蓮并に弟子檀那らもに霜露  
の命日影を待つ計りぞぞ。只今佛果小叶ふて。  
寂光の本土に居住して自受法樂せん時汝等が  
阿鼻大城の底に沈んで大若小相ふ時我等何計  
むざんと思はんぞらん汝等何計り浦山しく思  
はんぞらん一期を過る事やど無し何ぞ怨敵重

あるとも夢を退る心無く愁る心無し。縦ひ頸を  
むのころを以て引切り。どうとびりかこを以てつ  
ま。足よへほろと打ちを以てもむ共命のかよ  
もんさる。南無妙法蓮華經々々〇々と唱て々へ  
死々るあは釈迦多寶十方の諸佛の靈山會上  
ふての御契約あれば須臾の程に飛来り手を取り  
かこみ引懸靈山へ走り玉の二聖二天十羅刹女  
の受持の者を擁護し。諸天善神の蓋を指し幡を



上げて我等を守護してたゞかゝ寂光宝刹へ送り玉ふべき也。あらうねや。

六十 時刻相應事

如説修行抄内二十三云く。去まへ國中の諸学者等佛法をわろく学ふと云へども時刻相應の道と知らぬ。四節四季取々替り夏はあつく冬はつめたく春は花さる秋は菓なる春は種子を下して秋は菓を取べし。秋種子を下して春菓を取

ハ豈取るべきや。極寒の時あつと衣の用あり。極熱の夏は何れせん。冷風の夏は用あり。冬は何れせん。佛法も又此の如し。小乗の法流布して得益有べき時も有り。権大乘流布して得益有べき時も有り。實教流布して佛果を得べき時もあり。而るに正像二千年ふへ小乗権大乘流布の時あり。末法の初の五百年ふへ純圓一實の法華經廣宣流布の時也。鶏の曉を鳴る用あり。よひは鳴る物恠也。権實雜



亂の時法華經の敵を責むるて山林に閉ぢ籠て。攝受を行せば豈法華經修行の時をうらなふ。物恠は非む耶々々

大田消息内五云く佛の滅後も於て三時有正像二千餘年あり猶下種の者あり例へば在世の四十餘年の如く。税根を知らざらんへ左右あく實經を与ふべし。今ハ既も末法に入らば在世結縁の者の漸々も衰微し權實の二税皆悉く尽ぬ彼の

不輕菩薩出現して末世小於て毒教を撃つむるの時あり而も現今時の學者時税も迷惑し或ハ小乘を弘通し或ハ權大乘を授與し或ハ一乘を演説とも題目の五字を以て下種と為すべし。由来を知らざらむ歎

六十二 釈迦の像建立の事

日眼女御書内廿八云く。釈尊ハ天の二月あり。諸佛菩薩ハ萬水小浮べる影あり。釈尊一體造り奉る



人ハ十方三世の諸佛を造り奉る人あり。譬言ハ。頭をふるへハ髪ゆるむ。心をくらけば身動く。大風吹ハ草木閑あくる。大地動げバ大海さざりが。○昔優填大王釈迦佛を造立奉り。カバ。大梵天王。日月等木像を拜し。以参り。むい。く。木像説て云く。我を供養せんより。優填大王を供養す。ア。とのむへり。又影現王の繪像釈迦を書奉り。也。又此の如し。法華經よ云く。若人以佛故。道と云

つり。文の心ハ一切の女人釈迦佛を造り奉り。あハ。現在よハ日々月々。大小の難を拂ひ。後生ハ必む成佛とぞ。と。文あり。

六十二 木畫二像閉眼

法華骨目鈔内三云く。佛三十二相在ま。皆是色法也。最下の千輻輪より。相終の無見頂相に至るまで。三十一相ハ見べし。有對色あねハ書べし。作るべし。梵音聲の一相ハ見べし。無對色あるもバ



書べうらば。作るべからば。佛の滅後より木畫の二  
像あり。是三十一相にして。梵音聲なく。又心法闕た  
。故に佛に非ざ。生身の佛と。木畫の二像と。對  
するに。天地雲泥あり。何ぞ涅槃の後分る。生身  
の佛と。滅後の木畫の二像と。功德齊等ありと云や。  
又瓔珞經より。木畫の二像と。生身の佛より。方なり  
と説く。木畫の二像の佛の前より。經を置は。三十二相  
具足するあり。但し心無まは。三十二相を具足れ

ども。必らば。佛の非ざ。人天も。三十二相有が  
故に。木畫の三十二相を造て。其前より。五戒經を置  
は。此佛の輪王と等し。十善經を置は。帝釈と等し。  
出欲經を置は。梵王と等し。全く佛の非ざ。又木繪  
の二像の前より。阿含經を置は。聲聞と等し。方等般  
若の一時一會の。其般若を置は。緣覺と等し。華  
嚴。方等。般若の。別圓教を置は。菩薩と等し。全く  
佛の非ざ。大日經。金剛頂經。蘇悉地經等の。佛眼



六日の印直言ハ。名ハ佛眼大日ありと云へども其  
義ハ佛眼の大日ハ非也。例ハ華嚴經の佛の圓佛ハ  
非ざるが如し。名ハハより。三十一相の佛の前ハ法  
華經を置きて奉る。必が純圓の佛と齊等也。故ハ普  
賢經ハ法華經の佛を説云佛三種身方等より生  
是方等とハ方等部の方等ハ非也。法華と方等を  
云なり。又云此大乘經ハ是諸佛の眼目。諸佛是ハ  
曰て五眼を得と云く。○法華經を意得たる人の

開眼供養せざれば家ハ主無うして盜人入り。死人  
の身ハ鬼神の入が如し。今真言を以て日本の佛を  
供養すまば鬼入て人命を奪ふ鬼とハ奪名者と  
云ふ。魔入て功德を奪ふ魔をハ奪功德者と云鬼を  
仰ぐ故ハ今生ハ國を亡く魔崇る故ハ後生ハ  
無間ハ墮人死されハ神去り。其身ハ鬼神入替て子孫  
を亡く餓鬼といふハ我を食ふと云へる是也。智者ハ  
了て法華經を讀誦して骨魂と成せハ死人の身ハ



人の身あれども意ハ法身あり。生身得忍と云へる  
法門是あり。華嚴方等般若の圓を学智者ハ死人  
を生身得忍と成レ涅槃經ハ身ハ人身と雖も心  
佛心と同レと云へり。生身得忍の手本ハ純陀是也。  
法華を学する智者死骨ヲ供養セバ生身即法身也。  
是を即身と云。去たる魂を取り返して死骨ヲ入レ彼の  
魂を返して佛の意と成レ成佛是あり。即身の二字  
ハ色法成佛の二字ハ心法也。死人の色心を返して無

始の妙境妙智と成レ是即ち即身成佛也。即身  
成佛の手本ハ龍女是也。

六十三 生身佛事

釈迦佛御造佛の御事 内七 無始曠劫より未顕ま

まうまうさね己心の一念三千の佛を造り顕し  
しすは欲馳せ参て様み参せひへば名欲令衆  
生開佛知見乃至然我實成佛已来ハ是あり但し  
佛の御開眼の御事ハ急々伊與房を以てて名し



参せざるやむひ候へ法華經一部御佛の御六根よ  
續之入き参て生身の教主釈尊小成し参せて  
還りて迎へてせむへ自身並よ子は非ざんへ如  
何と存じひ〇云々 九月廿六日 進上富木殿

六十四

親の命よ背るる法華經を持つ孝行の事

聖愚問答抄外一五三小云く汝目を塞ひて心を静くして  
道理を思へ我の言も道を知りあかす親と主よ  
惡道ふかすらんを凍めざるや又愚人の狂ひ醉

て毒を服せんといへ我知りあかす身を凍めざるんや  
其如く法門の道理を存じて火血刀の苦しこと知り  
ながら争ふ思を蒙まらる人の惡道は隨ん事を歎  
ま云はざるべしや身を投命をも捨て凍ても  
あきたらば歎ても限り無し今生よ眼を合まらる  
苦し猶是悲しむ況んや悠々たる眞途の悲こ  
豈痛中ぞん哉恐ても恐るべし後世慎まて  
慎むべしハ菩提あり是罪を論ぜば親の命よ隨



ひ邪よこしま正ただも簡つぎやくなり。主君しゆくんの仰おほせ順あやうらんと云いふ。愚痴ぐちの前まへおの忠孝ちゆうかう不に似にた。共賢きうけん人の意いおの。不忠ふちゆう不孝ふかう是こゝよの過すぐべか。教主けうしゆ教尊かうそんの。且特山だんとくざんよ入いて十二年じふにねん高山かうざんよ薪たきぎを取り。深谷しんやうよ水みづを結むすて難行なんぎやう苦行くぎやうし。三十さんじゆ成道じやうだうの妙果めうくわを感得かんとくして。獨尊どくそん一代いちだいの教主けうしゆと成なりて。父母ふぼを救すくひ。羣類ぐんるいを導みちまひ。ま。ま。さ。て。不孝ふかうの人ひとと。中なべ。と。致ち。父母ふぼの命いのちを替かひて。無為むゐよ入い。還かへて。父母ふぼを導みちく。孝かうの手本てほんなる。佛ぶつと

手本てほんとすべし。彼かの淨藏じやうざう淨眼じやうげんの父ちちの妙莊嚴めうじやうげん王わう外がい道だうの法ほふよ著ちやくして。佛ぶつ法ほふを背そむま。給たまひし。二人ふにんの太子たいしの父ちちの命いのちよ背そむて。雲雷うんらい音王おんわう佛ぶつの御弟子おんでしと成なりて。終つひお父ちちを導みちま。娑羅樹さらかう王わう佛ぶつと成なり。むひし。と。不孝ふかうと云いふ。な。と。致ち。經文きやうもんおの。棄恩きおん入い。無為むゐ真ま實じつ報恩ほうおん者しやと説とて。今いま生せいの恩愛おんあいを。皆みな棄すて。佛ぶつ法ほふよ入いる。是こゝを實じつよ恩おんと。知しま。る。人ひと也なりと見みたり。

王舍城御書わうしゃじやうごしよ 内うち外がひ四し 小こ云いく。一切いっさいの事ことハ。父母ふぼよ背そむま。國王こくわう



不隨あきらひざれば不孝ふけうの者ものとて天てんの責せきをかうむる。但たゞ一ひと法華經ほけきやうのかたきふ成なりぬまば父母國主ふふくにしの事ことをも用もちひさるるが孝養かうやうとも成なり國くにの恩おんを報むかはさふてい去さまば日蓮にちれんハ父母ふふの手てをとりて制せいせしからし師しよてい一人ひとと勘當かんたうせしかども鎌倉殿かまくらどのの御勘氣ごかんき二度にどまでかうむりて既すなは頸くびと成なりしかども終つひは恐れおそれどしていへば今いまハ日本國にほんこくの人々ひとも道理だうり歎なげとすへんも有あやらん日本國にほんこくよ國主くにし父母師匠ふふししやうの中事なかつことを用もちひて

終つひ小天たせけの助たすけをかうむる人ひとハ日蓮にちれんより外ほかハ出いでがくくやいもんぞらん

六十五 法華退轉の事

南條兵衛七郎之御書なんじょうべゑしちらうのごしよ内うち三さん十じゆ小云こゝにく法華經ほけきやうを捨すて念ねん佛者ぶつしやと成ならせ給たまひ。峯たかねの石いしの谷たにへおろび雨あめの大地だいちよ落おつと思食おもせ。大阿鼻地獄だいあびぢやくハ疑うたがひなり大惡知識だいあくちぢき

小値あひて法華經ほけきやうを捨すて念佛等ねんぶつどうの推教えんけうを移故也うつるゆゑなり兄弟抄けいぎょうせう内うち十六じゆ小云こゝにく法華經ほけきやう第二だいに小云こゝにく常處地獄じやうぢよぢやく



如遊園觀在餘惡道如已舍宅等云。十惡を造る  
 人の等活地獄黑繩地獄ふんどちや地獄は落ちて  
 五百生或ハ一千歳を經る。五逆を造る人の無間地  
 獄ふ落ちて一中劫を經て後ふハ又還り地獄は落  
 ち。何事ふやいらん。法華經を捨る時ハさうも父母  
 を殺ふんどの様ふ。おひたぐうくハ見えらるもども無  
 間地獄ふ落ちて。多劫を經ひ没ひ父母と一人二人十人  
 百人千人萬人乃至十萬人億万人ふんど殺てひ

とも如何ク三千塵點劫を經ひへとも佛と一佛二佛  
 十佛百佛千佛萬佛乃至萬億佛を殺たりとも如  
 何ク五百塵點を經ひへとも然るふ法華經を捨ける  
 罪ふ依て三周の聲聞ク二千塵點を經諸大菩薩の  
 五百塵點を經ひける事とおひたぐうく覺へハ所詮  
 拳を以て虚空を打ふ拳を以て石を打ふハ  
 拳を以て惡人を殺すハ罪淺し善人を殺ハ罪深し  
 或ハ他人を殺すハ拳を以て泥を打ク如し。父母を



殺ハ拳を以て石を打グ如シ。鹿をわゆる犬ハ頭へ  
日んを。獅子をほゆる犬ハ。勝らざる。日月を飲ッ脩  
羅ハ頭へ七分破。佛を打。提婆ハ。大地をんて無間  
入。所對。依て罪の輕重ハ有けりあり

六十六

一字一點も捨る人ハ咎ある事

又云法華經ハ一切の諸佛の眼目教親尊の本師多  
一字一點も捨る人ハ千萬の父母を殺。科も過  
十方の佛の御身より。血を出。過も超。た。故。ふ

三五の塵点を經る事ハ十惡五逆罪も非。謀叛  
殺害の失も非。但惡知識。値て。法華經の信  
心を破。權教。移。故。あり。天台大師の云。若。值。惡  
友。則。失。本。心。云。本。心。ハ。法。華。經。を。信。む。心。あり。  
失。と。ハ。法。華。經。の。信。心。を。引。か。つ。て。余。經。へ。移。る。心。な  
。法。華。經。を。信。む。人。の。恐。る。者。ハ。賊。人。と。強。盜  
夜。打。虎。狼。獅子。等。より。も。當。時。の。蒙。古。の。責。より。も。  
法。華。經。の。行。者。を。惱。む。人。々。なり。



六十七 轉重輕受の事

兄弟鈔内十六小云く。如来現在猶多怨嫉。况滅度後云く。又一切世間多怨難信云く。○文の心へ我等過去正法を行ける者。怨を成して有けるが。今皈て信受すとせば過去人を障へつる罪。依て未来の大苦を招き越て小苦に相あり。此經文又過去の谤法に依て様々果報を受る中。あるひへ貧家小生。或は邪見の家。小生。或は王難小

相等云く。○經文明くたり。經文赫くたり。我身の過去の谤法者ありける事。疑ひある事あり。

六十八 其人命終之事

曾谷入道御返事外十三小云く。法華經第二云く。其人命終入阿鼻獄云く。問ふ其人と云。何等の人を指耶。答云。次上小云。唯我一人。○雖復教詔而不信受。又云く。若人不信。又云く。或復頓感。又云く。見有續誦書持經者。輕賤憎嫉。而懷結根。又云く。第



五云く。生疑不信者。道第八云く。若有人輕毀  
 之言。汝狂人耳。空作是行。終無所獲。等云。其人云。  
 此等の人を指あり。彼震旦國天台大師ハ。南北  
 の十師等を指あり。此日本國の傳教大師ハ。六宗  
 の人々を定たる也。今日蓮ハ。弘法慈覺等の三大  
 師并ニ三階善導を指て。其人と云也。

六十九

如我等無異之事

新池鈔外四十六云く。此經の信心と尸ハ。少も私無く

經文の如く人の言を用ひざして。法華一部指背く  
 事無き。佛成りいぞ。佛成事ハ別の様ハひそ  
 だ南無妙法蓮華經と他念無く唱へり。天竺  
 と三十二相八十種好備り。如我等無異と尸して。  
 釈尊程の佛不易くと成りいあり。譬ハ鳥の卵ハ。  
 始ハ水あり。其水の中より。誰がなすとも無れども。  
 背よ。よろい毛よと。いつくりく出来して。虚空よ  
 かけらぐ如く。我等も無明の卵あして。あさましき



身なれども南無妙法蓮華經の唱の母よあたため  
らま参せて三十二相の背出て八十種好のよろい  
毛むすろのて實相真如の虚空よかけらべー

【七十】我即歡喜之事

持法華問答鈔内三十一云く釈迦一佛の喜びむふのこ  
たふ諸佛出世の本懐おれば十方三世の諸佛も  
喜びむふべー我即歡喜諸佛亦然と説きむふむ。  
佛の喜びむふのこたふは神も隨喜しむふべー傳

教大師是と溝トむひーハ幡大菩薩ハ紫の袈  
娑を布施一空也聖人是をよみむひーハ松尾明  
神ハ寒風を防ぐ去まぶ七難即滅七福即生と祈ん  
小丸此御經第一なり現世安穩と見えなればなり。  
他國侵逼難自界叛逆難の御祈禱も此妙典よ  
過たふ無一令百由旬内無諸衰患と説きたれば  
なり

【七十一】一字小余字と収事



法華題目抄内十一小云く六萬九千三百八十四字。一  
の字の下よ。一一の妙あり。總して六萬九千三百八十  
四の妙あり。妙とハ天竺よハ薩と云ふ。漢土よハ妙と  
云ふ。妙とハ具足の義あり。具とハ圓滿の義あり。法  
華經の一一の文字一字くハ餘の六萬九千三百八  
十四字を納たり。譬へハ大海の一滴の水よ。一切の河  
の水を納め。一の如意宝珠の芥子計りなると。一切  
の財を雨らすと。如し。

〔七十三〕 羅什略を好む事

取要鈔内九小云く。玄奘三藏ハ略を捨。廣を好め。ハ  
四十卷の大品經を。六百卷よ成せり。羅什三藏ハ  
廣を捨て。略を好め。ハ千卷の大論を。百卷よ成せり。  
日蓮ハ廣畧を捨て。肝要を好む。所謂上行所傳  
南無妙法蓮華經の五字也。

〔七十三〕 智と愚と題目を唱よ同と事

松野殿御書外八云く。聖人の唱へさせし。題目の



功德と我等が唱へ中は。題目の功德と。何程の多ぬ  
いづとやと云く。更お勝劣有べうと云ひあり。其故ハ  
愚者の持てる金も。智者の持てる金も。愚者の  
焼火も。智者の焼せる火も。其差別無あり。但し此  
經の文の心よ背て唱へ。其差別有べし。此經の修  
行。小重々の品有り云く

第十四 持經者の宿善

守護國家論内十云く。法華經二云く。若此經法

信受する者あらん。曾一過去の佛を見て。恭  
敬し。供養し。亦是法を聞けりあり。法師品よ云く。  
如来滅度の後。若人有て。妙法蓮華經の乃至一  
偈一句を聞。一念も隨喜せん者ハ。乃至當よ知る  
べし。是諸の人等ハ。已よ曾一十萬億佛を供養  
したてまつる。流通の涅槃經云く。若衆生を有て  
熙連恒河沙等の諸佛よ於て。菩提心を發し。乃能  
是惡世よ於て。是の如く。經典を受持して。誹謗を



生ぜば善男子若能く一恒河沙等の諸佛世尊

小菩提心を護るはたと有らば然して後乃能く悪世の中は於て是法を謗らば是の如く經典を愛樂は已上此の如く等の文に設先解心なく此法華經を聞て謗らば大善の所生なり

七十五 首題即衆生佛性と云事 外三十八 外三十五

妙法蓮華經者一切衆生の佛性あり佛性あり法性あり法性といふ菩提あり謂る釈迦多宝十方

の諸佛上行無邊行等普賢文殊舍利弗目連天梵天王釈提桓曰日月天北斗七星二十八宿無量諸星天衆地類龍神八部人天大會閻魔法王上の

悲相の雲の上下へ那落の底所有る一切衆生備へる所の佛性を妙法蓮華經と名たるなり然が一及此首題を唱へ奉れば一切衆生の佛性よをまきて爰小集る時我身の法性の法報應の三身共よ引ねて頭を出るを成佛といふ也例せば籠



の内よある鳥の鳴時。空を飛衆鳥同時小集る。  
是を見て籠中の鳥も出んとさるる如く云く

七十六 名體相順之事

一部八卷外一文々異二十八品生起三かゞも首  
題の五字ハ是同ト。譬へバ。日本の二字の中五六十  
余州島ニツ入らぬ國有有二籠らぬ郡有有二ま  
飛鳥とよべ天天をかける者と知り禽獸と云へバ地  
を走る者と心得る名の大切なると益益一以て

此の如く。天台ハ名詮自性句詮差別とも名者大  
綱とも判まら此謂あり又名ハ物を召ま功あり。  
物ハ名小應まら用あり法華の題目の功徳も亦  
以て此の如く

七十七 裸の如き者ハ衣を得事

御書他受用ニ云く今生恥ハ物の数あり只後生  
の恥らた大切あま獄卒阿防羅刹等が三途河  
のもこあて衣整をとがん時を思ひ合せよ法華



經ハ後生の恥を隠さる衣あり。經よ云く如裸者得  
衣云く此本尊こそ。冥途の衣整ふれ能く信じむ  
ふべし。男の恥を隠さる。女有つとや。子の寒と哀  
まじまじする。親有つとや。日蓮を助けむふ事ハ今生  
の恥を隠しむふ人あり。後生よハ又日蓮御身の恥  
を隠しむべし。昨日ハ人の上。今日ハ我身の上あり。  
華咲ハ葉ニ成よりのあうとふ成事ハぞ。信心懈  
らば。南無妙法蓮華經と唱へむふべし。

七十九 無常之事

聖惠問答鈔外八云く抑も上ハ悲想の雲の上下  
ハ奈落の底までも生を受け。死を免る者やハ  
ある。然まば古人の詞も。朝ハ紅顔有て。世路  
不誇れども。夕べハ白骨となる。郊原ハ朽ぬ云く。  
雲の上ハ交り。雲のびんづらあざや。雪の杖と  
ひらくとも。其樂を思へば。夢の中の夢あり。山の  
ふもと蓬が本ハ。終の栖あり。玉の臺錦の帳も。後世



の道よハ何うせん小野小町。衣通姫が花の姿たも。  
 無常の風よ散り。樊噲張良が武藝は達せしも。  
 獄卒の杖を悲む。されバ心有し古人の云く哀金  
 たり。鳥邊山の夕煙り送る人とてとどまるべさか。  
 末の露本の啼や世の中のおくれささだつたあり  
 なるらん先亡後滅の理り始て驚くべきああらび。  
 願ても願へしハ佛道求ても求むべきハ經教あり今  
 此妙法蓮華經ハ諸佛出世の本意衆生成佛の

直道あり

御書十一外四云く嗚呼過し一方の程なきを以て知ぬ。  
 我等が命今幾程なと事春の朝よ花を詠し  
 時伴なし遊し人も花と共に無常の嵐よ散れて  
 名を残りて其人ハなし花ハ散ぬと云とも又来  
 春も開くべし。されども消し人ハ又何のせよか来  
 るべき秋の暮よ月を詠し時戯まむつひ人も月と  
 共よ有為の雲小入て後面影計り身よ添て物よ



事なり。月ハ西山ヨ入ト雖ども。又来ん秋も詠べし。  
然まども隠まし。人ハ今何ふり住めし。人覺東あり。

無常ノ虎ノ鳴聲ハ耳ヨ近付ト云ハ共驚ク事あり。  
屠所ノ羊ハ幾日ヲ無常ノ道ヲ歩ン雪山ノ寒苦  
鳥ハ寒苦ハ責ラレテ夜明ナシ栖作ント鳴ト云  
へども。日出ぬまじハ朝日ノ暖ウなるヨ眠リ忘マセ。  
亦栖ヲ作ラビ一生空ニク鳴事ヲ得たり。一切衆  
生も亦此ノ如シ。地獄ヨおちテ煙ヨ咽フ時ハ願ハ

今度人間小生テ諸事ヲ閣ス。三密ヲ供養シ後世  
菩提ヲ助ラント願ヘども。適人間ヨ来る時ハ名聞  
名利ノ風ハげしく。佛道修行ノ燈ハ消安シ。無益  
ノ事ヨハ財宝ヲ尽シヨ惜カラズ。佛法僧ヨ少シノ  
供養ヲ成スル。是ヲ倦ク思フ。是只事ハ非ズ。地獄ノ  
使ハ競リノナリ。寸善尺魔トシハ是ナリ。  
松野殿御書外ハ云ク。情世間ヲ觀シ。生死無常ハ  
まバ生あるものハ必ズ死シ。されバ浮世の中のおどに



墓たむらひかき事こと譬たとへ言ことばへハ電光でんくわうの如ごとく朝露あさつゆの日ひも向むかて消き

ス小似よたり風かぜの前まへの燈あかりび消きえ安やすく芭蕉葉ばせうの破やぶき

易やすくもふ異ことなり人ひと皆みな此無常むじやうを遁のがれど終つひも一度いちど

ハ黄泉よみの旅たびも赴おもむくべし然しかまハ冥途めいどの旅たびを思おもふ

闇くらくととしく暗くらけまハ日月星宿にげつせいしゆくの光ひかりも無なくせめ

て燈燭とうしゆくとて燈火とうかだふも無なしがる暗くらと道みちも又また伴とも

ふ人も無なし娑婆しやばも有あり時ときハ親類しんれい兄弟けいだい妻子しよし眷けん

屬ぞく集あつて父ちちハ慈あはれの志こころざし高く母ははハ悲かなしこの情なさけけ深ふかく夫おつと

妻つま階かゝ老らう同どう穴けつの鴛鴦うゑんの衾きん下した小枕せうまくらを並ならべ遊あそ戯び中ちゆう

なれども彼かの冥途めいどの旅たびハ伴ともふ事ことなし冥めいととて獨ひとり

行く誰たれり来きて是非せいひを訪とはんや或あるハ老少らうせう不定ふぢやうなれば

老らうたるハ先まへ立たち若わかきハ留とどまる是こゝハ順次じゆんじの道みち理りなり

歎あはれの中ちゆうハ思おもひ慰なぐさむ方かたもありぬべし老らうたる

ハ留とどまり若わかきハ先まへ立たちさんハ恨うらみ至いたり恨うらみしきハ幼こしく

祝いのち小こ先まへ立たち子こ歎あはれの至いたり歎あはれかき老らうて子こを先まへある

親おや此この如ごとく生死しじ無常むじやう老少らうせう不定ふぢやうの境さかいわき墓たむらひな



き世の中よに但ただ昼夜ちゆうやよ今生こんじゆうの貯たくわへまの思おもひ朝夕あさゆふ  
。現世げんぜの業ごうのまがりて佛ぶつを敬うやまひ法ほふを信しんぜば行ぎやう  
ひも無く徒いづらよ明あく暮くして炎魔えんまの廳庭ちやうていへ引迎ひきむか  
らまじし時ときの何なにを以もつて資糧しりやうと為なす。三界さんがい之長途のちやうとを行あら  
何なにを以もつて船筏せんぱつとして生死しやうじの廣海くわうかいを渡わたりて實報寂じやくじやく  
光くわうの佛土ぶつとに至いたる哉や

七十九 名號なごうより法號ほふごう勝かる事こと

月水鈔ぎつすいしやう内うち十八じゅうはちふ云いく南無妙法蓮華經なむめいほつれんげきやうとこと中ちゆう事じの唱となへ

七 百 〇  
がく。南無阿なむあとて佛ぶつ南無藥師如來なむやくしにょらいあんどこと中ちゆう夏げの  
唱となへ安やすさ亦また文字もんじの數かずの程ほどよ大旨おほしめの同おなじことけまことども  
功德くどくの勝劣しやうりやく違ちがひ替かへてことひなり。天竺てんぢくの習なひ佛ぶつ在世ざいぜ  
の前さきよハ二天にてん三仙さんせんの名号なごうを唱となて天てんをねことひける  
不ふ佛ぶつ世ぜ小出せうしゅつさせ給たまひてハ佛ぶつの御名ごなを唱となふ而しかる小  
佛ぶつの名号なごうを二天にてん三仙さんせんの名号なごうよ對たいをねことば天てんの名なハ  
瓦礫がくたつの如ごとく佛ぶつの名号なごうハ金銀如意こんぎんにぎ密珠みつじゆ等らうのことびことり。  
又また諸佛しよぶつの名号なごうを題目だうみ妙法蓮華經めいほつれんげきやうよ對たいをねことば瓦礫がくたつ



と如意宝珠との如し。○當世の学者ハ法華經の題  
 目と諸佛の名号と功德等と思ひ。又同事と思ふハ  
 瓦礫と如意宝珠とを同トと思ひ等と思ふが如し。  
 止觀五よ云。没へ世を厭ふ者の下劣の乗を翫び。  
 枝葉小攀附。狗作勢小押。猕猴を敬て帝釈と  
 為し。瓦礫を崇んで。是を明珠と為す。此黑闇の人  
 豈道を論ぐべし等云く文の心ハ。繼ひ世を厭て。  
 出家遁世し。山林よ身を隱し。名利名聞をたらし

て一向後世を祈る人にも。法華經の大乗をへ修  
 行せざして。權教下劣の乘小付たる。名諦等を唱  
 るを瓦礫を明珠とんと。思たる僻人は。譬へ闇さ  
 悪道小行をなす者。と書れて侍るなり。

八十 世間眼之事

八幡鈔内廿七云く。法華經第四よ云く。能解其義  
 之眼等云く。日蓮法華經の眼の眼たる。妙法蓮華  
 經の五字を日本國よ弘め通るハ。豈諸天世間の眼



小非也。眼も五所謂肉眼。天眼。慧眼。法眼。佛眼。有あり。此五眼ハ法華經より出生し給ふ故。普賢經より云く。此方等經。是諸佛の眼。諸佛是より曰て。五眼を具するを得と云く。○此等の經文の如く。妙法蓮華經ハ諸天の眼。二乘菩薩の眼。諸佛の御眼也。○日本國六十六箇國二の嶋一萬三千三十七寺の佛ハ皆或ひハ画像。或ハ木像あり。○皆法華經を以て眼とすべし。所謂此方等經ハ是諸佛の眼等云く。

妙樂小云く。一乘妙行を眼目と為。等云く。

八十一 今經劣機成佛を説

放光授職灌頂下小云く。問。鹿苑已見思を断。迹門に至て。實之を断。迹門の初住ハ本門に至て。實之を得といはハ。今經ハ惑者小對して之を

説と云べし乎。答。此小依て一問。如来の本意。法華經實相の理。皆顯たるべし也。謂法華經易信易解。悟の者より。迷者を利益。善者より。悪者と



益一菩薩よりも二乘先益と男よりも女を益と  
されば法華經の能を中より二惡闍女非情等の  
成佛を先とよきあり。今前經を難信難解と云ハ  
此能無故あり取も解者よりも惑者ガ今經の機  
とハ成べともあり。去れば天台大師涌出品を釈し玉  
ふよ解者惑者の二人俱よ今經の機と判せり。妙  
樂ハ解惑俱機と定判と此上よ妙樂重之之問  
答ト共よ妙經の機成るべト。落居し玉へり謂。

文云く問既よ惑者と云ハ何ぞ妙機と名く。答  
菩薩已よ無明を破之之を稱し解と為大衆仍  
賢位よ居之之を多く惑と為之機中よ位辨む故  
よ解惑と云ふ此釈分明也故よ知ぬ本門ハ十界三  
千の依正解惑二人新得久得斥て授職と與其授  
職の職位ハ皆妙覺位よ在無始色心妙境妙智と  
授職する故なり

外道神変を現し事



聖愚問答鈔外一云く阿伽陀仙ハ恒河を付耳小  
湛へて十二年者兔仙ハ一日の中ハ大海を吸ひ千以  
長階ハ霧を吐き二鳥巴ハ雲を吐く去れども未ど  
佛法の是非を知己因果の道理を辨三異朝の  
法雲法師ハ誦經勤修の劬四須臾ハ天華を雨せ  
しかど妙樂大師ハ感應如斯猶不稱理とて未ど佛  
法を知らばと破五むつり

入涅槃之事

祈禱鈔内六云く佛の御年滿八十とりせし二月十五日  
の卯卯の時東天竺舍衛國俱尸那城跋提河の邊六  
して佛御入滅成七へ八由の御音九上ハ有頂横ハ三  
大千大千世界十ま十一々十二皆十三さ十四たり十五こそ十六目も十七心も消  
えてたり十八五天十九世二十十六の大國二十一五百の中國二十二十千の  
小國無量の粟散國等の無量の衆生一人も衣食  
を調へ二十三上下を簡二十四く二十五牛馬狼狗鵬鷲蚊虻等の  
五十二類の二十六一類の數大地微塵二十七をも二十八尺二十九一三十ね三十一べ三十二況や



五十二類を名。此等の類ひ皆香花衣食を備へて。最後の供養とす。一切衆生の橋折あんとは。一切衆生の眼被あんとは。一切衆生の父母主君師匠死あんとは。音響をきかば身の毛よごろのこあは。泪を流すそのみあは。頭をたたく胸を押へ音を惜まは。さげびりぐ血の涙血の汗俱尸那城。大雨よりも志げく下りく。大河よりも多く流れたる。是偏へは。法華經より佛に成たり。かへ佛の恩の

報しがこゝの故なら

八十四 偏頗なく題目を唱事 附生死大事血脉の事

生死大事血脉鈔外十三云く。日蓮が弟子檀那寺の自他彼此の情なく水魚の思を成して。異体同心にして。南無妙法蓮華經と唱へ奉る處を。生死一大変の血脉といふあり。然も今日蓮弘通するところの所詮是あり。若然らば廣宣流布の大願も叶へる者あり。刹へ日蓮が弟子檀那の中より。同体異心の



者例せば城者くく城を破る如く〇生死一大  
 事の血脉相承御尋前代未聞の事あり此文小  
 委悉あり能く心を得て只南無妙法蓮華經釈迦  
 多宝上行菩薩血脉相承修行し玉へ火ハ燒照を  
 を以て行と為すと水ハ垢穢を淨るを以て行と為し  
 風ハ塵埃を拂ふを以て行と為すと又人畜草木の為  
 して魂となるを以て行と為すと大地ハ草木を生ると  
 以て行と為すと天ハ潤を以て行と為すと妙法蓮華經

五字も又是の如く本化地涌の利益是あり上行  
 菩薩末法よ此法門を弘んが為し御出現之有べし  
 由經文のへ見へて以ていども如何がやらん上行菩薩  
 出現とやせん出現小非とやせん日蓮先粗弘あり  
 相構てく強盛の大信力を出して南無妙法蓮  
 華經臨終正念と祈念し玉へ生死一大事の血脉此  
 より外は全く求ること莫れ煩惱即菩提生死即涅  
 槃との是あり信心の血脉無んば法華經を持つる



無益あり。委細の七日又く○恐々謹言

八十五

三根一生成佛の事 内十八

十如是御書初下共云く十方佛土中ハ唯一乗の法

のこ有て二もなく三もなり。佛の方便の説をば除く

なりと説きまへるあり。此ハ法華經の法説段とて

三世の諸佛世不出も本意あり。一切衆生佛は成る

うるはしき道ありと定めさせられたるあり。是を心よ

深て念く觀念まれば我身本覚如來と觀せられて

夜の明るが如く無明の闇晴て本覚曉よ成て我一

心の中より本有常住の本覚如來の顕まよふ事

此生一生の内は限あり。譬ハ民田を作るハ春夏耕作

しつまいハ秋冬必む藏ふ収て所作終るが如し。法華

經の行人ハ一生の内は所作終て即身成佛とるあり

是を觀念するハ春夏耕作するが如し。一生の内は悟

を得る事ハ秋冬藏ふ収め終るが如し。田ハ早田と中

田と晚田との早きと半々と遅と三種の不同あれ共



皆一年の内に限るが如し。法華經の行人も上中下の  
三根遅速あまどむ。一生の内に限るあり。上根の人々

不日小解開く中根の人へ定無く。中間も悟を開く。

下根の人へ觀念よふくして。延び行程も臨終の時よ

至りぬまば又延行べそ時なく成ぬまば睡の覚めて

諸夢止りて覺よ成が如し。今迄見へはる處生死

妄想のひが事へ迹形なく成とて本覺のうつつよ還

る。法界を見とてせは皆寂光極樂して苦く思ひ

はる我此身へ三身即一の本覺如来あり有べきあり。

此妙法蓮華とへ我心性の八葉なる。白蓮華の體

ひて有の云あり。去は妙法蓮華と云經の名ふてを

非だ。我心體の名ふて有けるなり。是を説聞かせ

ふ。佛の御言おれは經とへ名るあり。去れは我等

無始より以来今まで我心體小迷ひ我心の名小迷

て。此を悟らば只今此經教に依て是を知ゆるより。

應で我身三身如来ふては妙法蓮華ふては三徳究



竟の躰（まがら）ふてもありけるなり。此（これ）を悟（さと）りぬれば無始（むし）以来（いらい）。今（いま）まで思（おも）ひ習（あ）ひつる思（おも）の妄想（もうぎやう）の理（こと）りの昨日（きのふ）の夢（ゆめ）の如（ごと）く迹形（あとがた）もなく成（な）り行事（ぎやくじ）あり。是（これ）を二返（にへん）讀（よ）奉（たてまつ）らば法華經（ほっけきやう）を悟（さと）て如法（にやうぼう）如説（にやうじやく）。一部（いちぶ）讀奉（よ）して之（これ）のあまべし。十返（じうへん）八十部（はちぶ）あり。百返（ひやくへん）八百部（はちぶ）あり。千返（せんべん）の如法（にやうぼう）讀奉（よ）してあまべしあり。是（これ）を如説（にやうじやく）修行（しゆぎやう）の人（ひと）とい（い）名（な）るあり

八十六 法華題目名聞難事

法華題目抄（ほっけだいのくせう）内（うち）十二（じふに）小云（い）く。法華の御名（ごな）を聞事（きくこと）ハ百千萬劫（ひやくまんごふせんごふせんごふせんごふせん）の間（ま）ふも聞難（きくがた）。大地（だいち）の上（うへ）ふをり（たて）て大梵天（だいぼんてん）王宮（おうきやう）より芥子（けし）を投（な）る。錐（こし）のさきに芥子（けし）をつらぬかまなるより。法華經の題目（だいのく）は値奉（あひたてまつ）る事難（ことがた）。此（この）須弥山（すみせん）は針（はり）を立て。彼須弥山（かのすみせん）より大風（おほりかぜ）のつよく吹（ふ）ん日糸（ひいと）を下（くだ）さん。針（はり）の穴（あな）は糸（いと）をよめて糸（いと）のさきにの入りたるんより。法華經の題目（だいのく）は値奉（あひたてまつ）る事難（ことがた）。されば此經の題目（このきやうだいのく）を唱（とな）へさせむらん人（ひと）ハ思食（おがひく）べし。生盲（まうろう）の



始て眼あき。父母を見るよりもうねく。強敵も取  
られたる者の妻子を見るよりも。怖くなく思食べ

八十七 題目を唱る證文の事 附宗旨建立の事

又云く。問て云く。題目計り唱る證文之ある耶。答て  
云く。法華經第八云く。受持法華名者。福不可量  
云く。此文小題目計り唱る福ハ。なかりばと見えてハ。  
一部八卷二十八品を受持讀誦。隨喜護持。と云ハ  
廣あり方便壽量品等を受持。乃至護持。と云ハ

略なり。但一四句偈乃至題目計を唱る者と護持  
と云ハ。要あり。廣略要の中ハ。要の中ハ。要あり。同

て曰く。妙法蓮華經の五字ハ。いくばくの功德收る  
や。答て云く。大海ハ衆流を収め。大地ハ有情非情と  
持ち。如意宝珠ハ萬の財を雨。梵王ハ三界を領  
と。妙法蓮華經の五字も。亦復此の如し。○此經の一  
字の中ハ。十方法界の一切經を納たり。譬へハ如意

宝珠ハ一切の宝を収め。虚空ハ萬像を含み。如し。此



經の一字ハ一代ヲ勝ル。故ニ妙法蓮華經の五字  
又八萬法藏ヲ超過スルアリ

八幡鈔内キト云ク。今日蓮建長五年癸卯四月廿八日

より。今年弘安三年庚辰十二月不至リ。二十八年之間

又他事もなく唯南無妙法蓮華經の五字七字を

日本國の一切衆生の口不入んと勵むたかりなり。

是即ち母が赤子の口不乳を入んと勵む慈悲あり

御書外四云ク。已不今當の經文を深く護リ一經

の肝心たる。題目を我も唱へ人をも勸む。麻の中の

蓬草を打つる木の如し。自體ハ正直ありせんども。

經のまつく不唱ます不曲まする心無し。當り知るべし。佛

の御心の我等が身は入らせますべしとなりがまり

題目なり

松野殿鈔外八云ク。然し在家の御身ハ但余念ふ

く。南無妙法蓮華と御唱ありて。供養し給が肝心

あり候あり。それも經文の如くなりハ隨ひ演説も有



べき欲世の中物うからん時も今生の苦こそんか  
たし。況んや来世の中の苦をよと思食しよ。  
南無妙法蓮華經と唱へ悦こむからん時も今生  
の悦の夢の中の夢。靈山浄土の悦こそ實の悦。  
れと思食し合せて又南無妙法蓮華經と唱へ退轉  
あく修行して。最後臨終の時小御覽せよ。妙覺の  
山より走り登りて四方をこつと見れば。あらし面白や。法  
界は皆寂光土よりして。瑠璃を以て地と。金の繩

を以て八道をこさかへり。天より四種の花あり。塵を  
音樂聞えて。諸佛菩薩の常樂我淨の風よりよ  
る。嬉樂快樂し。まふとや。我等も其數より遊  
戯し樂む。いふ事。よ近付けり。信心よりくして。か  
る目出度處より至る。ぐからん事云々

八十九 信力に依りて成佛して登る事

波木井殿御書 終了ふ曰く日蓮の第一の法華經の  
行者あり。日蓮が弟子檀那等の中。日蓮より



後小来り玉ひひり。梵天帝釈四大天王炎魔法王の御前ふても日本第一の法華經の行者日蓮房が弟子檀那ありと名乗て通りぬるべし。此法華經ハ三途河ふてハ船と成り。死出の山ふてハ大白牛車。眞途ふてハ燈とあり。靈山へ参る橋あり。靈山へ御座して良の廊ふて尋させぬへ必待奉るべくい。但各の信心よ依るべくい。信心だよ弱くハ何小日蓮が弟子檀那と名乗せぬ共御用ハひり。信心よ三つ御

座して信心弱くハ。峰の石の谷へころび。空の雨の大地ふ落と思食せ。大阿鼻獄疑ひ有べから。其時日蓮なり。恨させぬふたよ返り各の信心よ依るべくい。

九十一 今此三界下

御書十三云く今此三界○護と説と給て此日本國の一切衆生の為よ。釈迦佛の主あり。師あり。天神七代。地神五代。人王九十代と神と王と。猶釋迦



佛ぶつ所しよ從じゆあり。何いかも沉しんんや。其その神しんと王わうとの眷けん屬ぞく等とうと  
 や。○此この佛ぶつハ我われ等らが為ためよ。大だい地ちより厚あつく。虚こ空うよ  
 ても廣ひろく。天てんより高たかき。御ご恩おんまう。まは佛ぶつぞり。  
 か。る佛ぶつあまの。○父ふ母ぼより重おもんど。神かみよりもつが。あ  
 奉ほうるべし。か。ごもひつ。何いかある。大だい科かあり。守しゆ護ご  
 して。よも捨すてむ。地ち神かみも。給たまふべから。然しかる。  
 上かみ一人ひとりより。下しも萬まん民みん不ふ至しる。ま。阿あま。堂どうを。阿あ  
 弥あ陀だ佛ぶつと本ほん尊そんと。りて。あ。故ゆゑよ。天てん地ちも。御ご瞋しんり。有あり

と見えてい

九十一 人法と勝る事

持ぢ法ぽう華け問もん答たふ抄せうハ。内うち王わう小せう云いく。受う難げんを。人ひと身みを受うけ。値あ  
 ひが。佛ぶつ法ぽうは。値あて。争いさり。空むらく。過すべ。を。同おなく。信しんを取と  
 る。な。ら。ば。又また大だい小せう權けん實じつの。有ある。中ちゆうに。諸しよ佛ぶつ出しゆ世せの。本ほん懷くわい  
 衆しゆ生じゆ成じやう佛ぶつの。直ちき道だうの。一いち乘じやうを。こ。を。信しんま。へ。け。れ。所しよ持ぢ  
 の。御ごん經ぎやうハ。諸しよ經ぎやうハ。勝かちれて。ま。ま。能のう持ぢの。人ひと又また諸  
 人ひとハ。勝かちたり。爰こゝを。以もつて。經ぎやうハ。云いく。能のう持ぢ是ぜ經ぎやう者しや於お一切いっせつ



衆生中亦為第一と説むなり。大聖の金言疑なし。  
然る小人此理を知らばよく名聞を求むる狐疑の  
源と偏執を致さる。隨罪地獄の基あり

元十三

凡聖と佛性同じて妙法と呼頌る事

初心成佛抄内三三云く我等衆生の佛性と梵王  
帝釈等の佛性と舍利弗目連等の佛性と文殊弥  
勒等の佛性と三世諸佛の解の法と一體不二ある  
理を妙法蓮華經と名るあり。故に妙法蓮華經と

唱ふれば一切の佛一切の法一切の菩薩一切の聲聞  
一切梵王帝釈炎魔法王日月衆星天神地神乃至  
地獄餓鬼畜生修羅人天一切衆生の心中の佛性を  
但一音よ呼び頌し奉る功德無量无边あり。我已  
心の妙法蓮華經を本尊とあがめ奉りて我已心の  
佛性南無妙法蓮華經とよびよびまて頌まむる處  
を佛といふあり。譬へば籠の中の鳥なれば空飛ぶ  
鳥のよをわけて集るが如く空飛鳥あつまれば籠の



内の鳥の出んとすらるが如し。口は妙法をよびまねば。  
 我身の佛性もよまねて。必ず願まじふ。梵王帝釈の  
 佛性へよまきて我等を守り。佛菩薩の佛性へよ  
 れて悦びまふ。されば若暫持者。諸佛亦然と説給ふ  
 此心あり。三世の諸佛も妙法蓮華經の五字  
 を以て佛と成まふ。故に三世諸佛。出世の本意一切  
 衆生皆成佛道の妙法といふ。是なり。此等のおもむ  
 こを能く意得て佛となる道あり。我慢偏執の心なく。

南無妙法蓮華經と唱へ奉るべきあり

九十三 雨之祈の事

西山殿御返事内九云く日蓮佛法を試るよ道理と  
 文證よハ過ぐ。又道理文證よりん。現證よハ過ぐ。○  
 漢土日本の二箇國ハ真言宗ハ破らるべし。善無畏  
 三藏漢土よ渡て有し時ハ玄宗の時あり。大旱殿  
 有しに祈雨の法を仰せ付らねていし。大雨を降  
 せし上一人より。下萬民に至るまで。大に悦びし程よ。



須臾有て大風吹来りて。國土を吹破りしが。與ま  
て有しあり。又其世は。金剛智三藏渡り。又雨の御祈  
有しかば七日の内は大雨ふる。上の如く悦て有し程。  
前代未聞の大風吹しかば。真言宗へ恐しき悪法お  
りて。月氏へ遣れしが。兎角して留り。早ぬ又同き  
御代は。不空三藏雨を祈りし程は三日の内は大雨  
降る。悦事前の如く。又大風吹て。先は二度よりも  
おびたがし。数十日止まれば。不思議の夏ふて有し也。

是ハ日本國の智者愚者一人も知ざる事あり。之を  
知んと思ふ。日蓮存生の時。委細は尋ね習ふべし。  
日本國より天長元年二月は。大旱魃有り。弘法大師  
神泉苑ふりて。祈雨有べきみて有し程は。守敏と申  
せし人進て云。弘法へ下鴈あり。我へ上鴈あり。先仰を  
蒙るべしと申す。請も隨て。守敏先之を行ふ。七日と  
申ふ大雨ふる。然といへども。京中計みて。田舎より降  
らば。弘法は仰せ付られて有しかば。七日雨ふる。二



七日あつちも雨あめぬらぎら。三七日さんしちじつも降ふらび。尔あつち者を天子てんし我がと祈いのちて雨あめを降くだしぬ。然しかを東寺とうじの門人もんじん等ら我師わがし雨あめからびと号ごうはなるる日記にじきを引ひて習あべう。天下てんか第一だいいちの誑しやう惑くわくあり。天台てんたい大師だいしハ陳ちんの世よハ大旱だいかん魃たつあり。法華ほっけ經きやうを讀よみて須臾しゆゐんハ雨あめを下くだしぬ。王臣わうしん頭づかみを傾かむら。萬民ばんみん掌たまを合あはさせり。而しかも大雨おほいあめハあるる。風かぜも吹ふきぬ。甘雨かんうハあるる。有ありし。から陳王ちんわう大師だいしの御前ごぜんハ座ざして。内裏うちらへ還かへりし。事ことを忘わすれし。まよみし。此この時とき三度さんどの礼拝らいはいハ有ありし。去いるる弘仁こうにん

九年くわんねん大旱だいかん魃たつ有ありし。嵯峨さあがの天皇てんかうハ真ま綱なうとり臣下しんかと。冬ふゆ嗣しを以もてり。中なからきれ。から法華ほっけ經きやう金光明きんくわうみやう經きやうを以もて。傳でん教けう大師だいし祈いのち雨あめ有ありし。三日さんじつとり。聖せい人にんハ南都なんと第一だいいちの僧そうあり。四十人しじゅうにんの御ご護命ごくわいとり。聖せい人にんハ南都なんと第一だいいちの僧そうあり。四十人しじゅうにんの御ご弟子でしを相具あひぐして。仁王にわう經きやうを以もて祈いのち雨あめ有ありし。五日ごじつとり。せしに雨あめ下くだぬ。五日ごじつハあるる。三さん日じつハあるる。



而も雨あらかうくハ負ふ成せむひねの善無畏金  
剛智不空等の祈雨ハ雨降て而も大風の添ハハ  
如何有べき外道の法あれども云ふ甲斐ふ道士  
の法も雨ハふる夏之あり増して佛法ハ小乗あり共  
法の如く行はるならん争り雨の降ざるを

〔九十四〕 三昧を唱より題目を持が勝る事

御書 内十一 云く三昧をかりを持つ人大魚の難を免ま  
何ハ況んや法華經の題目ハ八萬聖教の肝心一切

經の眼目也云く

〔九十五〕 已心の佛性迷悟ハ依事

上野殿後家尼御前御書 三十二 云く夫浄土といふも  
地獄と云も外ハハハ但我等が胸の間ハあり是を  
さると佛と云迷を凡夫と云是をさるとハ法華經  
あり若然ハ法華經を持奉る者ハ地獄即寂光とさ  
どういぞのあらたのもやく

〔九十六〕 此經難持下 附此即題目の事 附真佛子の事



御書外巻 四十七小云く。讀持此經ハ五種の中の讀誦と。  
 受持ハ二行あり。今日蓮等の類南無妙法蓮華  
 經と唱へまる者ハ讀也此經ハ持と云あり。此經  
 とハ題目の五字あり是眞佛子ハ法華經の行  
 者ハ眞ハ釈迦法王の御子也然る間ハ王位を継べ  
 べき也悉是吾子の子と是眞佛子の子と能く心得  
 合ハべとあり。今日蓮等之類南無妙法蓮華經と  
 唱へ奉れハ眞の釈迦法王の御子あり

九十七 臨終題目を唱る事

上野殿御返事内三十一小云く。臨終ハ南無妙法蓮華經  
 と唱へさせ給ひけり隻只一眼の龜の浮木の穴ハ入り。  
 天より下ハま糸の大地の針の穴ハ入るハ如し。あらし不思  
 議ハ南無妙法蓮華經とトハ法華經中の肝心人中の  
 神の如し。今末法ハ入ぬハバ。余經も法華經も詮あり。  
 但南無妙法蓮華經なるハズ。斯うハ出ハしハも。わ  
 たぐしの針ハハわしハ釈迦多宝十方諸佛地涌千畧の



御計あり。此南無妙法蓮華經は余事をまじへず。  
ゆくゆくは僻支あり。日出ぬれば燈籠あり。雨降るに。  
露はふんの詮がある。嬰兒は乳より外の物をや  
なうべき。秋良薬は又茶を加ふる事なり。○自然は  
此義はあつて信じるあり。たうとく

九十八 信者本尊行儀所作の事

唱法華題目鈔内十二云く問て曰く法華經を信ぜし  
人へ本尊並は行儀並は常の所行へ何ふてくべき。

答て曰く第一本尊は法華經八卷一品或は  
題目を書て本尊と之を定むべし。法師品并は神力  
品も見えたり。又たへたる人の釈迦如来多宝佛を  
書ても造ても法華經の左右に之を立まらるべし。又  
たへたる人の十方の諸佛普賢菩薩等を造り書  
ちもるべし。行儀は本尊の御前ありて必ず坐立行ある  
べし。道場を出て入行住坐臥をえらぶべからず。常の  
所行は南無妙法蓮華經と唱ふべし。たへたる人の



一偈一句をも讀奉るべし。助縁よへ南無釈迦牟尼  
佛多宝十方の諸佛一切の諸菩薩二乘天人龍神  
八部等心ふ随ふべし。愚者多世ふれば一念三千の  
觀を前とせば其志あらん人の必らば習學して  
之を觀むべし

九十九 題目計を唱ふ功德の事

同内十一云く。問て曰く。唯題目計を唱ふる功德如何。  
答て曰く。釈迦如来法華經を説んと思食てせし

出御坐して有しかども四十余年の程の法華經の  
御名を秘し思食して御年三十の比より七十余に至  
るまで法華經の方便を授け七十二ありて始て題目  
を呼ば出させ給ひ候へば諸經の題目より比すべから  
ず。其上法華經の肝心なる方便壽量の一念三千  
久遠實成の法門の妙法の二字よ収まら

百 本迹二門妙法二字よ収る事

并、諸佛菩薩草木瓦砾等妙法の二字よ収る事  
十方世界諸佛釈迦一佛の各身と云ふ事



日外五云く一切の諸佛菩薩十界の因果十方の  
草木瓦礫等妙法の二字は非だに云事なり○  
今の法華經四十余年の諸經を一經ふ収て十方  
世界の三身圓滿の諸佛をありて釈迦一佛の分身  
の諸佛と談る故一佛一切佛なりて妙法の二字に  
諸佛なる収まると。故に妙法蓮華經の五字を唱る  
功德莫大也。諸佛諸經の題目は法華の所開あり。  
妙法の能開と成ると知て法華經の題目を唱べきなり。

同二 蓮緣功德の事

御書 □ 云く。天竺に嫉妬の女人あり。男を憎む故に。  
家内の物を悉く打破り。其上におまりの腹立ちや。  
まごころけいとも変り。眼の日月の光の如くかやま。  
口の炎をまくが如し。姿の青を鬼赤き鬼のごとく  
ふて。年来男の讀むる法華經の第五卷をとり。兩の  
足もて散々ふみける。其後命尽きて地獄に墮つ。兩  
の足計り地獄へ入らば。獄卒鐵杖を以て打てども



入らば是法華經をふくむ。逆縁の功德は依あり。

今日蓮をふくむせうも。第五卷を取て。予が面を

うら。是も逆縁となるべし。彼は天竺。此は日本。彼の

女人。是は男。彼の兩の足。此は兩の手。彼の嫉妬の故。是は

法華經の御故あり。されども法華經の第五卷。八同

なり。彼女人の足。地獄へ入るんよ。此兩の手。無間

入るんや。但し彼の男をふくみて。法華經をふくま

ば。是は法華經と日蓮とをふくむるれば。一身無間

入るべし。經よ云く。其人命終。阿鼻獄と上手をかり

無間よ入るべし。見へむ。不便あり。終よ八日蓮よ

あひて。佛果をくべし。秋例の不輕菩薩の上慢の

四衆のあはし

百二 善無畏破地獄之事

御書内云く。善無畏三藏。八月。氏烏婁那國。佛  
種王の太子あり。七歳ありて。即位。十三ふして。國を  
兄に譲り。出家遁世。五天竺を修行して。五乘の道



を極め三学を兼みひま。達磨掬多と申聖人小  
 値まて真言の諸印契一時頓受一即日御灌  
 頂人天の師と定めむひま。鷄足山よ入て八迦葉尊  
 者の髪をそり王城よ於て雨を祈り給ひく。觀  
 音日輪の中より出て水甃を以てそそぎ。北天竺金  
 粟王の塔の下ふて祈精せしかば文殊師利菩薩大  
 日經の胎藏の曼荼羅を現て授けむ。其後開  
 元四年辰漢土よ渡て玄宗皇帝之を尊ぶこと。日

月の如く又大旱厥あり。皇帝勅宣を下し三藏一  
 鉢小水を入暫く加持しむひま。水の中よ指計りの  
 者あり。反して龍となる。其色赤色あり。白氣立昇り。  
 鉢より龍出て虚空よ昇り忽ちよ雨をぬり。其の  
 如くいさぐさ人あれども一時頓死ありて蘇生して  
 語て云我死つる時獄卒来て鐵繩七筋付て鐵の  
 杖を以て散々よさひちま。閻魔王宮よ到り八萬聖教  
 一字一句も覚べは唯法華經の題目計志とぞりま。



顯名を思ふ。鐵の繩小。ゆるまるぬ。息を續ぎん。  
 高聲よ唱て云く。今此三界。救護等云。七の鍊繩  
 切碎けて十方。ちる。閻魔王冠をかむけて。南庭よ  
 下向ひみひき。今度ハ命尽むとて。還さるありと  
 語り給ひて。今日運不審して云。善無畏三藏ハ〇  
 真言の力を以て。閻魔の責を脱まば。んハ天世震且。  
 日本等の諸國の真言師。地獄の苦を脱るべま。委  
 細。此事を勘へたる。ふ此三藏ハ世間の輕罪ハ身よ

座す。と。諸宗并。真言の力よ。滅さるん。此責  
 ハ別の故。法華經。誹謗の罪あり  
 御義。上。云く。三世の諸佛の成道。信の一字より  
 起るなり。此信の字ハ元品の無明を切處の大利劍  
 也。其故ハ信ハ無疑。信とて。疑惑を断破する利劍あり。  
 解と者。智惠の異名あり。信ハ價の如。解ハ宝の如  
 一。三世の諸佛の智惠をかりハ。信の一字あり。智惠  
 とハ。南無妙法蓮華經あり。信ハ智惠の因。して名



字即ち信の外に解りたり。解の外に信あり。信の一字を以て妙覚の種子と定たり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經と信受領納する故に無上宝聚不求自得の大宝珠を得たり。信の智慧の種あり。不信の墮獄の因あり。又云く信の不變真如の理あり。其故に一切法皆是佛性と辨達して實相の一理と信るなり。解の隨緣真如あり。自受用智を云たり。同上卷云く。父小二有法華經釈尊日蓮是あり。法

華經に一切衆生の父あり。此父は背く故に流轉して凡夫となる。釈尊に一切衆生の父あり。此佛は背く故に備ふ諸道を輪るあり。今日蓮は日本國の一切衆生の父あり。章安の云く。為彼除惡即其彼親。上退大の大といふ。南無妙法蓮華經あり。無明といふ疑惑法の謗也。自ら覆るといふ法然弘法慈覺智證道隆良觀等の惡比丘謗法等の失を念ふ覆あり。同上卷云く。大恩といふ南無妙法蓮華經あり。大恩を報



ぜんと思ひく法華經を受持せざるなり是即ち釈尊の御恩を報じざるなり。大恩題目ありと云事ハ次下より以希有事と説けり希有の事と云題目あり。此大恩の妙法蓮華經を四十余年の間秘しむして。後八箇年より大恩を開きしむあり。法王啓運矣。運ハ大恩の妙法蓮華經あり。今日蓮等の類南無妙法蓮華經を唱へ奉り。日本國の一切衆生を助んと思ふハ豈世尊大恩よ非ざるや

五三〇  
祈禱經口訣云く迹門よりハ靈山淨土と云ひ。本門よりハ大恩教主の釈迦牟尼佛と云事。外道邪師は對してハ小乘三藏佛以て大恩教主と名まじも。權大乘の佛は望みハ大恩よ非ざる。實大乘法華經の迹門の教主は望みまじ。權大乘の佛ハ又大恩よ非ざる。本門壽量の教主五百塵点の教主は望みまじ。迹門の佛又大恩よ非ざる。故に迹門の時よりハ但靈山と云ふ。本門の段に至り。大恩の言を置あり



百三 今此三界之事

南條兵衛七郎殿御書内三十四法華經第二云今此  
三界而不信受等云々此文意ハ釈迦如来ハ我等  
衆生ノ主師親あり我等ガ為ノハ弥陀佛ハ主ハ  
非ズ師ハ非ズ親ハ非ズ獨リ三徳を兼たる思深  
き佛ハ釈迦一佛ヲ限り奉る親も親もこそよき  
釈尊程の師主ハ有難くらむ侍色此親と師と主  
との仰せよ背ん者ハ天神地祇ハ捨らむ



らんや。不孝第一の者あり。故小雖復教詔而不信  
受等説きたり。設ひ尔前の經よ。付を給て。百千萬  
億劫行せさせ給ふとも法華經を一返も南無妙法

蓮華經と申させ給ひ。不孝の人たる故よ。三世  
十方の聖衆小捨られ。天神地祇も怒こむらん歎

百四 病即消滅之事

御書 小云く。信心の口を開て。妙法の良薬を服  
せん行者ハ。病即消滅不老不死ならん



百五 釈迦日蓮一人苦之事

諫曉八幡抄内三十七云く涅槃經云く一切衆生  
異の苦を受く。悉是如来一人の苦云く日蓮云く  
一切衆生異の苦を受く。悉是日蓮一人が苦と云ふ  
も也

毘玉撮要集平假名附下之巻終

毘玉撮要集平假名附 奥書

明治九年三月七日原版々權御免許  
同十三年十月六日平假名校正再版御届  
同年十二月上之巻 刺成  
同十四年三月下之巻 刺成

定價金貳拾錢

平假名 京都府平民  
校正者 毘尼薩台巖

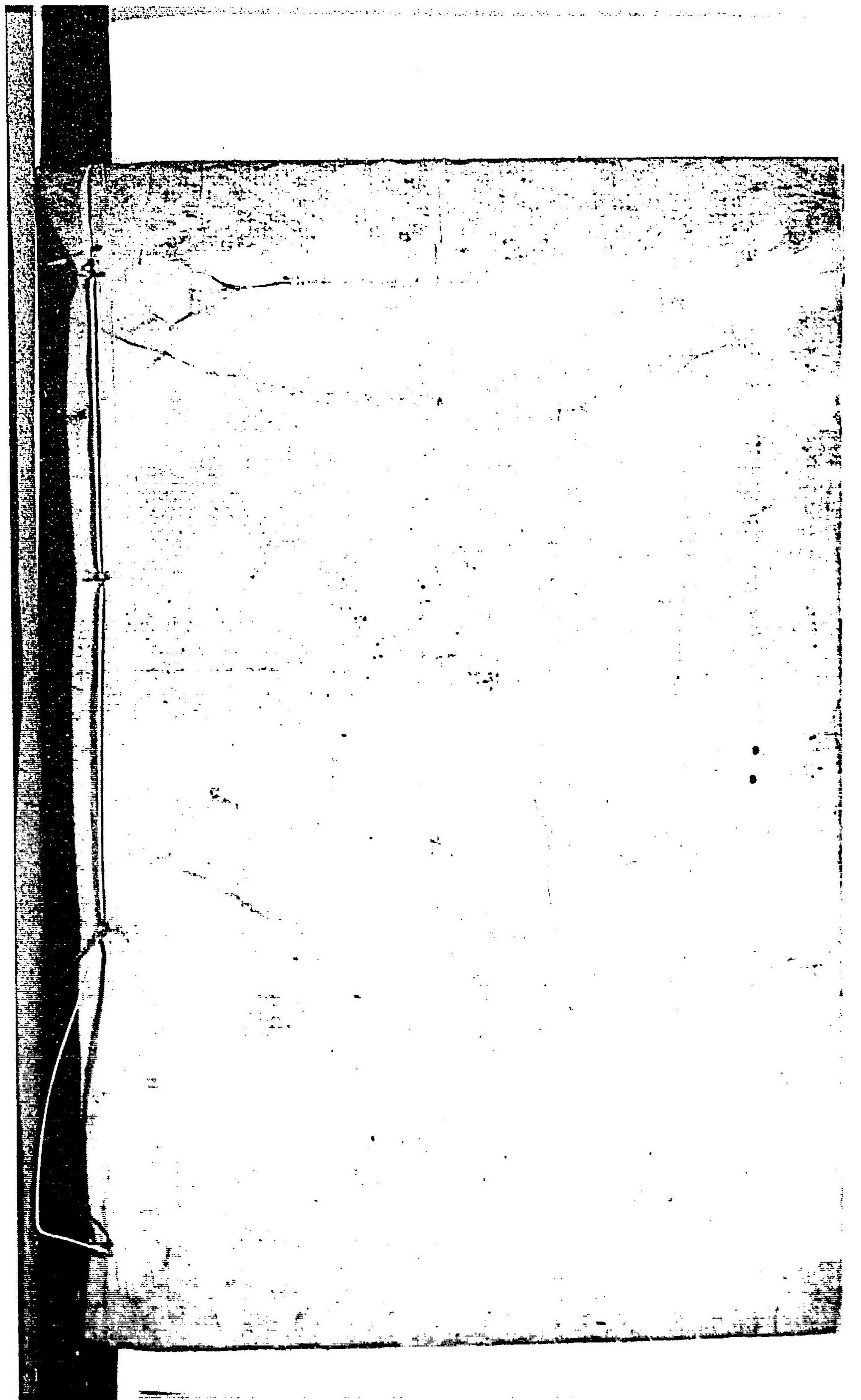
紀伊郡第二組深州村  
四百廿三番地瑞光寺住職

京都府平民

原版人并 村上勘兵衛

上京區第廿組曇花院前町  
四百五十二番地







特36

779

東 京 圖 書 館

一 冊	二 八 號	三 三 架	一 九 函	和 書 門 類
--------	-------------	-------------	-------------	------------------